



# 今までの記念誌と 一緒に振り返る 戦争のこと

区がこれまで発行してきた記念誌には、戦争を体験した人や、平和を願う人たちの言葉がたくさん記されています。本章では、これまでの記念誌と一緒に、その歩みを振り返りながら、登場した人たちの思いを紹介し<sup>たど</sup>ます。過去を辿ることは、今の平和のありがたさを感じることに繋がります。受け継がれてきた思いを大切に、未来へとつないでいきましょう。





## 戦中・戦後 あれこれ (思い出すままに)

空襲



寄稿

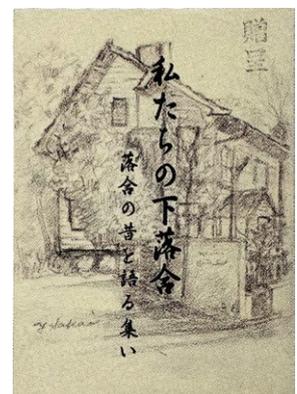
堀尾 慶治さん  
下落合四丁目在住  
終戦時：16歳

昭和20年4月13日の空襲で、洗い場（道沿いの湧水の所に造られた洗い場で、近所の人たちが共用していた）の崖の上のちょうど階段上、左側の3軒が焼夷弾の直撃で炎上。3～4メートルの路地と、炎上している家の庭を入れると対面の家の板塀まで10メートル以上離れていましたが、輻射熱で塀が煙を上げ始める火勢です。消火活動と言ってもわずかな水も無く、火叩き（竿の先に縄の束を付けたもの〈ハタキ〉、濡らして使う。当時、各家で命令で用意）や布で叩いて燃え上がるのを防ぐだけです。当時ほとんど断水状態が続いていたので、消防車など居るわけもなく、ただ布で叩いて見守ることしかできません。当時働き手の男性は、50歳前後か私たち中学生。家の間隔が昔は離れていたのと、樹木で守られ風が弱いので、直撃を受けた家以外の類焼は免れたと思います。消防の放水で助かった所など何処にもありません。装備、水、総じてどうすることもできなかったのです。

我が家は、運よく焼夷弾の直撃を免れました。その代わりに、家が雨漏りするようになりました。調べたら、屋根に焼夷弾の尾翼が刺さってしまし

た。ご存じですか？ 焼夷弾は、寸法は覚えていませんが、直径10センチ大、長さ60センチぐらいの単体が、60本ぐらいの集合体で、それが鉄の留め板と帯で3段に束ねられ1個の大型焼夷弾になっています。それを投下中に空中で散乱させ落ちてくるのです。その尾翼部分ですから相当大きいものになります。それが屋根に突き刺さっていたのです。それと、鉄の留め板も多数落ちていました。終戦後まで記念に保存していたのですが、戦後の食糧難の時にくず屋に鉄くずとして良い値で売られ、お腹に収まってしまいました。今思うと、「記念品にしておけば…」と残念です。その焼夷弾は、日本の木と紙でできた家の為に開発され「モロトフのパン籠」というニックネームがついていたように記憶していますが…。

そのパン籠から焼夷弾がバラ撒かれると、ちょうど線香花火のように、沢山の火の玉が夜空からフリフリしながら降ってくるのです。その上には探照灯に浮かぶB29の編隊、下から撃つ高射砲も届かず、それも打ち上げ花火のように夜空に彩りを添えてくれました。見上げている我々は、楽しむどころではなく、自分たちの頭上に焼夷弾が落ちてくるのかハラハラしながら見ていたのです。



私たちの下落合

私はどういう訳か、空襲には縁があります。

昭和17年4月18日、アメリカの艦載機<sup>かんさいき</sup>B25によって初めて日本本土が空襲を受けた時、私は中学2年（府立第二十中 現都立大泉高等学校・附属中学校）。ジフテリアにかかり、小滝橋<sup>おたぎぼし</sup>にあった隔離病院の豊多摩病院に軽症のため入院できず、早稲田鶴巻町の岡崎医院に入院させられました。午後、空襲警報<sup>くわしゅうけいほう</sup>も出ないうちに小型爆弾の洗礼。火災も起きていたので急遽避難。岡崎医院も被害を受け、屋上に干してあった私の中学の制服が焼ける被害を受けました。早稲田上空に飛来したのは1機ですから、それほどの騒ぎにならず、私も詳しい情報も持たずじまいでした。これも残念です。後から知ったことですが、本土数カ所を空爆し、太平洋上から中国本土へ抜けたとのこと。

次は、昭和19年7月に、サイパンが陥落し、11月からは本格的な本土空襲の幕開けです。最初に来たのは私たち中学4年生の勤労働員先の中島飛行機の武蔵野工場。三菱と並ぶ東洋一の主要飛行機エンジン工場です。警戒警報<sup>けいかいけいほう</sup>の中、工場の食堂で食事中に突然の爆発音。1トン爆弾の洗礼、サイレンが鳴り、「空襲だ！」との叫びに、皆地下道に避難。一緒に動員で来ていた府立六中（現都立新宿高等学校）の生徒が避難していた地下道で、死者の出る被害を受けたそうです。帰る途中、工場の周辺には多数の1トン爆弾の20メートルぐらいのすり鉢状の穴が、爆発<sup>すぶ</sup>の凄まじさを物語っていました。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」発行時（平成28年3月発行）のものです。



## 戦争は勝ち負けなどではない

軍隊



聞き取り

おおた としお  
太田 壽夫さん  
終戦時：18歳

私の生まれは昭和2年、開戦時は14歳の学生です。住まいは新宿区<sup>しんじゅく</sup>でしたが、昔の言い方ですと東京市淀橋区<sup>よどばし</sup>と呼ばれていた地域に住んでいました。

昭和16年12月8日の朝、私はその頃、早稲田の中学へ自転車に乗って向かっていました。登校中ラジオから軍艦マーチが聞こえてきて、開戦や、米英軍との戦いに突入といった内容も聞こえました。私自身この時に戦争の恐ろしさを体験したわけではなく、わからないことが多かったですね。ただ本当にびっくりしましたよ。登校中の出来事だったので、学校に着いても開戦を知らない生徒もいました。

学生帽と、身には帯剣<sup>たいけん</sup>を着け、巻脚絆<sup>まききゃはん</sup>を巻き、

銃を担いで富士山麓の滝原  
や、千葉県習志野で演習を重  
ねたこともありますよ。

当時は体の丈夫な20代の  
若者には有無を言わず召集  
令状という「赤紙」が送られ  
て兵隊になったわけです。私  
は17歳の時、召集を待たずして「どうせ軍へ入  
るなら」と、親にも大した挨拶もせず、ひとり志  
願兵として立川にあった軍の適性検査を受けに  
行ったんです。なぜ自ら行ったかといっても、志  
願兵は陸海空の兵種を選べますし、そういう時代  
だったのでね。そのまま福岡県大刀洗陸軍飛行学  
校へ入隊しました。そこからは新兵としての訓練  
を受けましたよ。宇都宮でも、グライダーの練習  
をしましたね。その後、仙台で第2師団第3中隊  
に配属になり、飛行訓練で連日を過ごしましたよ。



身体検査の写真

料だけでなく、飛行機を飛ばす油もなかったわけ  
です。だから、宗像丸の前後は空っぽだったんで  
すよ。それで私たちは船体後方に乗って台湾を目  
指していたのです。しかし、前方に魚雷が激突。  
船の頭は海水で下がりましたが、船自体は沈没せ  
ず助かりました。余談ですが、戦争中、赤十字の  
旗を掲げた船というのは、当時負傷兵が乗ってい  
たものでね。基本は攻撃しない。人間の良心でしょ  
うかね。そういうこともありましたよ。

その後、台湾の第74飛行場中隊となり、終戦  
を知ったのは台北の山の中にある飛行場でした。  
ここで玉音放送を聞いた時には先のことが全くわ  
からなかったですね。復員後、地元に戻ると水道  
管だけが残った焼け野原が広がっていました。母  
と弟は岐阜県、妹は学童疎開しましたが、父は家  
で空襲に遭いました。兵隊に出た自分が生き残る  
ことができたこと、家族5人が再会できたのは、  
運が良かったとしか言えません。紆余曲折を経た  
青春時代でしたが、戦争は絶対にしないことです。  
戦争は勝ち負けなどではないのですから。

一瞬のうちに焼土が広がり、多くの命が失われ  
ることを知っていれば…。

青春は 夏の軍歌と ともに去り

中学5年の時の富  
士山演習場にて。  
すねにゲートル  
を巻いている。



昭和19年4月1日、  
大刀洗陸軍飛行学校  
(福岡県)にて。当  
時は一等兵だった。

昭和19年12月30日、私は第3航空軍に転属と  
なり、南方へ向けて門司港を出港しました。私た  
ちが乗るのは油運送船でね、宗像丸という船でし  
た。この船はもともと船体の前後に油を積み運ぶ  
船だったんですが、当時は何しろ資源がない。食



太田さんへのインタビュー

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」  
発行時（平成28年3月発行）のものです。



## がくどう そ かい 学童疎開の思い出

疎開



寄稿

かんの あきら  
菅野 晃さん  
終戦時：12歳

昭和19年の新学期の頃だと思う。学童疎開が本格化し始めた。学童疎開というのは、太平洋戦争末期に、戦争の災禍を避けるため大都市の国民学校（昭和16年4月から従来の尋常小学校は国民学校となり、昭和22年に現在の小学校となる）児童を、農山村地域に集団的にまたは個人的に移動させることで、あのお宅は親戚の田舎へ疎開したというような話が、ちらほらと聞こえていた。

当時私は現在の新宿区代田町に居住し国民学校初等科6年生であったが、知らない土地へ疎開をするなら知っている場所の方が良いと思い、箱根岡田高原学園が疎開児童を募集していたのでそこへ行くことにした。箱根は風光明媚な所で、現在の小涌園の所を左に曲がり旅館の三河屋の右隣にあり、夏休み中であつたにもかかわらず、2日陽が照って少し焼けたかなと思うと、1日雨が降り、雨の多い所だという印象があつた。とは言え、食事は少なく食生活は決して良いとは言えなかつた。

そのうち東京では、集団疎開の準備が進み、改代町は栃木県上都賀郡加蘇村下久我にある常真寺というお寺へ行くことになった。そこは、現在のJR日光線の鹿沼駅から三里半ぐらい入ったところで、現在は鹿沼市になってしまったらしく地図

を見ても確認できなかった。私はその中に妹がいたので合流した。妹の話では、往路は貨車で、鹿沼を下りてからはトラックだったとのことである。

寺での集団生活は、始まりの1週間ぐらいの間は泣いていた子どももいたようだが、楽しいと言うまではいかないが、極端なケンカやいじめのようなことも無かつたように思われ、概ね順調にいったのではなかつたか。

ここでの集団生活を思いつくまま記してみようと思う。

まず悩まされたのはノミとシラミで、ノミは畳に潜っているのか、布団に住み着いているのか、喰われれば痒いのは当たり前だが、布団の裏はノミの糞の黒い跡が、赤飯に胡麻を振り掛けたようになっていた。

次はシラミで、下着の縫い目にびっしりと提灯行列のように並んでいた。寮母さんたちが熱湯処理をしてくれたので、被害は少なくなつた。他の寮では、家恋しさか児童が脱走を試みたということもあつた。

悲しいこともあつた。一人の女の子が、腹痛を起こしたが、治らないので鹿沼からお医者さんが来たが、亡くなつてしまった。後で聞くとところによれば、腸閉塞とか腸捻転とか言っていた。現在ならば、このようなことには絶対にならないと思う。

戦争は、いつの時代でも、一番弱い者にし寄せが来る。理由などない。戦争は反対だ。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」発行時（平成28年3月発行）のものです。



# がくどうしゅうだん そ かい 学童集団疎開

疎開

## 寄稿

ま なべ しげなが  
眞鍋 重命さん 下落合四丁目在住  
終戦時：11歳

おちあい  
落合第四小学校の第一次集団疎開は、昭和19  
年9月23日に疎開先の茨城県笠間市の西念寺、龍  
泉院、不動院に出発しました。お寺が陸軍の兵舎  
として接收されたため、第一次集団疎開の児童た  
ちは、内陸部である群馬へ再疎開します。東京空  
襲が日常的になり、第二次学童疎開が促進され、  
東京に残っていた児童たちも疎開することにな  
り、群馬県佐波郡玉村町の高橋寮、常楽寺、東栄  
寺、法蓮寺に疎開します。この学童疎開をまとめ  
た記録「僕たちの戦争 学童集団疎開 落合第四  
小学校」より掲載します。

## 「出発の朝」より

出発の儀式は教育勅語の奉読からはじまる。教  
頭先生が校庭東側にたてられた石造りの奉安殿か  
ら、恭しくとりだした教育勅語を黒漆の角盆にの  
せて校長先生のところに運んでくる。校長先生が  
勅語を奉読されるあいだ、僕たちは腰を深くまげ、  
頭をまっすぐに伸ばした最敬礼の姿勢で聞かなけ  
ればならない。周囲には見おくりの家族が心配そ  
うな顔でみまもっている。せめて空襲のない安全  
な地方に子どもを疎開させられれば。心は張り裂  
けそうだったろう。そして、これが最後の別れに  
なった家族もいた。校門をでると、まず氷川神社  
へ参拝。ぶじに東京へ帰れることを祈る。ひろかつ  
た境内は、いつもなら子どもたちの遊び場だ。

日の丸の旗と校旗を先頭に巡査に引率され、隊  
列をくんで目白駅まで行進。道の両側には残留児  
童たちが見おくりになつ。家族は駅まで送ってく  
る。いざお別れとなると決意の下から不安がゾロ  
ゾロと首をもちあげる。「泣かないぞ。もうイツ  
チョマエの少国民なんだから」



目白駅に向かって（「僕たちの戦争 学童集団疎開 落合第四小学校」より）

## 「ホームシック」より

常磐線下り列車が岩間駅に到着する。龍泉院組  
と不動院組はここで下車。駅を出るとウキウキと  
足どりも軽くそれぞれのお寺にむかう。

龍泉院は愛宕山の麓に立っている。二つの溜め  
池を東西に分けるように立つ、大きな桜並木の道  
から、すこし坂を登ったところにある大きなお寺  
だった。本堂の外陣に男の子と女の子が左右に分  
かれて蒲団を敷く。内陣の右脇の部屋に男の先生  
二人、左脇の部屋に寮母さんが二人、寝泊まり  
する。

先に到着している蒲団や行李を各自が受けとる

と、さっそく枕投げがはじまる。泊まりがけの遠足の気分だ。しかし寝る前の枕投げのハシャギぶりは三日ともたなかった。東京が恋しくて、本堂の柱の陰で一人が泣く。それはアツという間にみんなに伝染した。

そんな僕たちを少しでも慰めようと村の人々は、それぞれの家へ二・三人ずつの児童を引きとり、一泊させて家庭の味を味わわせてくれた。それで父さんや母さんのいる東京へのホームシックを一時的とはいえ、忘れることができた。

村の人々の力によって僕たち龍泉院の疎開児童

は、食料に不自由することはなかった。

『龍泉院はとてもよいところです』『ご飯も美味しいです』とハガキに書いて東京に送った。それを読んだ二年生の妹が「わたしも早く集団疎開に行きたいな」と憧れた。

先生、龍泉院の住職、奥様、檀家さん、惜しみなく物心両面で子どもたちを援助して下さった多くの村の人々。いま僕たちは心からなる感謝を捧げます。「どうもありがとう。本当にありがとう」

(「僕たちの戦争 学童集団疎開 落合第四小学校」より)



## 疎開時の苦勞が 戦後の私の礎に

疎開



聞き取り

おおさき ひでお  
大崎 秀夫さん  
筆筈町在住  
終戦時：10歳

生まれたのは江東区の富岡八幡宮の近くで、家は材木問屋でした。私は8人兄弟の3男坊です。兄たちが次々召集されて、富岡八幡様へ旗を持って、見送りに行ったのを昨日のこのように覚えていてます。戦争を意識したのは、それが最初ですね。

そのうち兄弟のなかで私だけ集団疎開することになりました。通っていた平久小学校の疎開先は新潟の弥彦村で、寮は弥彦神社のすぐそばの駅前

にあった山田旅館です。

疎開中で何が一番、辛かったかという地元の子どもたちに「疎開、疎開」って、いじめられたことです。私は体が小さかったですが、負けん気が強かったので、10人くらいの上級生にも体当たりして向かっていきました。その後は、いじめもなくなりましたね。

あとは靴がなくて、裸足で学校に通っていたのを思い出します。雪が降っても裸足だから、周りの人がびっくりして、寮のおばさんが長靴をくれました。食べ物もなかったのも辛かったね。寮のご飯では足りなくて、近所の農家で作業を手伝って、おにぎりをもらったりして空腹を凌いでいました。考えてみたら、地元の大人の人たちにはずいぶん良くしてもらいましたね。

疎開中は普通、親が面会に来ます。うちは一度も来なかったけど寂しいとも思いませんでした。親が来て「かわいそうだ」といって、東京に連れてられて帰った子は、3月10日に亡くなりました。終戦後もうちだけ迎えがなくて、いよいよ孤児院に入るという2日前に親父が来たのだけれど、感激もなかったですね。

東京に戻ってしばらくして、また私だけ茨城で暮らすことになり、1人で1年半ほど暮らしました。まだ小学生ですよ。でも、うさぎを繁殖させて売ってお小遣いを稼いだりして、たくましく暮らしていました。

そうやって戦中・戦後と苦労して、生きながら

えたのだから、少しでも長生きして、地域のために役に立ちたいという思いがありました。また人の情けがわかるから、頼まれるとイヤといえない。それで、気がついたらさまざまな役職を引き受けて、今日があるというわけです。小さい時の試練は未だに忘れないですし、その経験が今の私の基礎になっているのは間違いないですね。

今の子どもたちには、礼儀や感謝を伝えることの大切さを学んで、親を大事にしてもらいたいです。そうすればこれからの日本も良い国になると思います。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」発行時（平成28年3月発行）のものです。



## 忘れられない疎開先での出来事

疎開



聞き取り

おおもり たもつ  
大森 保さん  
市谷台町在住  
終戦時：8歳

開戦当時は4歳でした。前から「戦争がありそうだ」と父から聞いていたのと、市ヶ谷に住んでいて大本営が近く、沢山軍人さんがいたために情報が入っていたので、「始まったのかな」と思っただけでした。

昭和20年3月10日の大空襲を見て、おふくろ

が子どもだから危ないというので、実家がある茨城県の日立に疎開させられました。当時、小学一年生でした。日立に避難しても日立製作所が国営の工場になっていたの、狙われて艦砲射撃にありました。戦艦とか大きい船が海の沖にずらっと並んで、一斉に大砲で攻撃してきました。工場がほとんど壊滅したところもあるくらいでした。何発かは工場を通り過ぎて町に落ち、死人も出ました。幸い私は、おじいさんにおぶわれて逃げたので助かりました。

疎開中、ロッキードP38にも追いかけられました。すごい勢いで急降下してきました。神社のお

社には木が生い茂っているのので、その中に逃げ込むと上からはわかりません。そこに穴を掘って防空壕を作り、友人とみんなで隠れていました。穴の中から覗くと向こうからおばあさんが来ました。一生懸命駆けていたけれど、間に合いませんでした。おばあさんは水を張ったばかりの見晴らしの良い田んぼのところで撃たれてしまいました。機銃掃射ですからもう体はめちゃめちゃで、血がぱっと散っていました。今でも夢に見たり、思い出したりすることがあります。



昭和22年頃のバラック

終戦当時は8歳でした。当時ラジオもありませんでした。おじいさんおばあさんの年代の人は漢字が読めない人も多く、新聞をとっている家も何軒とありませんでした。12時に何か放送があると聞き、おじいさんが庭の挿し木にラジオをひっかけて近所の人に触れ回りました。全部で20人くらい集まって聞きました。

あまりいいラジオでないのでざわざわして、さらに古い言葉で言われるのでちんぷんかんぷんでした。おじいさんが朝鮮総督府の書記官をやっていたので意味を説明してくれて、日本が負けたことを知りました。みんな唖然としていました。子どもがみんな戦争に行っている人が多く、中には泣きだす人もいました。これは大変なことになっ



焼け跡に倉庫と庭園の石塔、風呂屋の煙突が見える。(昭和22年頃)



焼け跡に水道管が見える。(昭和22年頃)

たなと思いました。これからの生活の心配というより、戦地に行った人が、負けてどうなるだろうと心配していました。

平和はすごく大事なことです。ただ、平和なのが当たり前だと感じているかもしれませんが、決して平和なのは当たり前じゃなくて、自分たちが考えて、積み重ねて、こしらえていかないといけないと思います。何百万と戦死した人もいますから、そういう人たちが何のために戦ったのかというのを少しでも、一歩でも、理解するようにして欲しいです。今ある平和を積み重ねていってください。平和に浮かれすぎないで大事にして欲しいです。



大森さんへのインタビュー

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」発行時（平成28年3月発行）のものです。



## 「銃後」の戦争体験

勤労働員



寄稿

おおたけ よししげ  
大竹 良重さん  
榎町在住  
終戦時：17歳

平和日本の今日では、既に死語に等しくなった「銃後」が私の戦争体験の場である。

昭和19年末から翌20年の戦争も終焉に近づいた時期の体験は、心に鮮明に残っている。

当時私は満17歳、紛れも無い軍国少年の一人であった。同い年で軍隊に志願する者が周囲にも少なくなかった。工業学校生徒であった私は、学徒動員の一人として、東京都下小金井町の軍需工場に派遣された。工業学校ということで十分な訓練も受けぬまま旋盤部門に配属された。工場の人員構成は、男子女子の動員学徒と一般徴用工で大半を占め、熟練工と目される人材は徴兵の影響か、非常に少なかった。工場は海軍の水中聴音機（ソナー）を造っていると聞かされたが、終ぞ完成品を見ることは無かった。

昭和19年の11月頃から米機の本土空襲が活発になった。記憶では、昭和20年4月7日午前10時頃に、その年何度目かの空襲警報が発令された。従業員は工場の命令で作業を中止して工場グラウンドに掘られた簡易防空壕に分散して避難した。狭く薄暗い壕内で仲間と空虚な会話を交わしながら、真上を通過するB29の爆音を漫然と聴いていた。

何分か経って、気配で安全を確認したか、一人

が壕を出ると、次々と皆が明るい外へ出た。

爆音の中上空を見上げると、真っ昼間、B29の編隊が1万メートル近い高空をゆうゆうと、我が物顔に飛行していた。翼がキラキラ光っていたのが強い印象として残っている。軍国少年は拳を固めていたに違いない。

我々の工場の真上を通過したB29の編隊が、三鷹あたりの上空で爆弾と思われるキラキラ光る物体を降り注ぐように投下しているのが遠望された。三鷹には中島飛行機の主力工場があり、以前にもB29の標的にされている。

投下から、何秒かすると、何か体に微震が伝わった。他の従業員も感じた様で、工場内に一瞬異様な雰囲気漂った。

250キロ爆弾を含む多量の着弾で、中島飛行機では、動員学徒や徴用工も入った多数の従業員が犠牲になっている。ということが現実だと思っても、当時の我々は「悲愴」な気持ちは湧かなかった。戦争のもたらす非情さと、心の奥に「明日は我が身」という思いがあったことも否めない。

更に、遠望とは言え、爆弾が雨のように投下されるシーンを見ながら何を思っていたのかは定かでないが、不条理はすべて戦争遂行のためという理屈のもと、自己欺瞞が加わって納得し非情になっていたとも思う。

平和な今日では、建築現場でボルト1本を落させても問題化する。状況を前者と比較すれば、平和の尊さを取返して論ずることも無い。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」発行時（平成28年3月発行）のものです。



## がくと どういん 学徒動員

勤労働員



寄稿

みやざき れい こ  
宮崎 玲子さん  
北町在住  
終戦時：15歳

当時は、短期の勤労働奉仕ではなくて、工場への労働も強制されました。太平洋戦争下では成年男子が兵役に駆り出されたため、労働力が逼迫しました。昭和16（1941）年に、14歳（数え年）から25歳の未婚・無職の女性を強制的に工場などの労働力とする勤労働員徴用に関する法令が国家総動員法に基づき制定され、主に軍需工場の労働に当てられました。未成年学徒及び国民学校高等科卒業以上の女性も労働要員とされて、その中には国民学校高等科や女学校の生徒から店員や家事手伝い、花嫁修業中の人なども含まれていました。当時日本領であった台湾、韓国、南樺太の女性も同様の徴用を受けました。日本では一般女性が軍務関係で働かされることは少なかったと思いますが、イギリスもこの制度が適用されて軍務関係でも働いたそうです。

秋の稲刈り勤労働奉仕が済んだ11月、私たち2年生は軍需工場への動員となりました。すでに上級生は工場に通っていました。学校の生徒でありながら、授業を全くせずに、直接工場に行き作業をする毎日が始まりました。仕事は信管（弾丸の先につけて炸裂させる部品）作りでした。疎開前

の東京に残った同級生は、計器に夜光塗料を塗る作業にあたり、塗料には人体に影響を及ぼす成分が含まれていたそうです。彼女らは状況が悪化して材料が滞り、最後はやることなしに遊んでいるだけの状態もあったといいます。

同じ頃、中学生は松根油しょうこんゆの材料としての松の大木の根を掘るために動員されました。平成23（2011）年の東日本大震災で大きな被害を受けた陸前高田では一本の松の木が残りましたが、あの松原も戦時中に大分切り倒されてその根が使われたと聞きます。松根油は松の根を乾留して得たテレピン油の一種で、航空燃料にしようとしていました。

私は別に具体的な不調はなく健康だったのですが、生まれつきの顔色の悪さ（面の皮が厚くて血の気が見えない？）や、やや細めだったためか、身体検査で工場動員から外されました。外見だけで健康を判断する時代でした。工場に通う同級生から不心得者と白い目を向けられ、学校は楽しそうと羨ましがられ、また親が手をまわして工場動員を避けたのではないかと疑われて肩身の狭い思いでした。これが後日、本当に体調を崩す原因となったのでした。しかし、毎日遊んでいたわけではなく、在校生（1年生と専攻科生）用の給食の味噌汁作りや、職員室の掃除、日ごとに増える疎開転入生の世話などに忙しく過ごしました。特に味噌汁作りは前日に汁の実を刻み、当日は1時間以上前から大釜で薪を焚いて行う不慣れな仕

事で、工場の方が楽かとも思いました。

私はどういうわけかこの学級に属してから少しずつ体重が減り始め、毎日胃が痛くなりましたが、地元の日赤病院に通っても消化薬を処方されたのみでした。その頃の食糧不足や、食養生の悪さも響いていたと思われますが、後にこの不調はストレスによるものではないかと判断されています。

高等小学校1年生は、現在の中学校1年で13歳ですが、彼女らも勤労の日々となりました。午前中は目的不明の穴掘り、午後は錆びた鉄棒の錆び落として、錆で真っ赤に汚れた手は土で落として帰路についたそうです。毎朝「花もつぼみの若桜

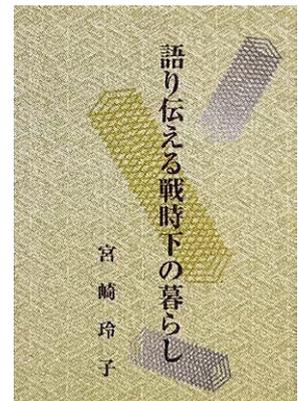
五尺の命ひっさげて」と学徒動員の歌（作詞・野村俊夫）を歌って働きました。ごくわずかな報酬は郵便貯金に振り込まれましたが、戦後のインフレで、貯金が下ろせるようになった頃はほとんど価値を失ったといいます。また勤労学生への特別配給された下駄は台のみで、鼻緒を手作りしなければ使えませんでした。同じ年齢でも女学校では1年生の工場動員はされませんでした。外地に住の人たちも、女子学生や小学生まで同様に勤労働員に駆り出されたそうです。

当時の学校の予防医学は実に粗末でした。虚弱者のクラスには、結核で長期間休み快復して工場

へ戻るまでの準備期間として登校している者もいました。当時はゴホンゴホンと言いながらも熱が下がれば快癒とされていました。私は5月の身体測定の際に、それまで陰性だったツベルクリン反応で腕全体が腫れるほどとなり、落ち始めていた体重は25キロまでやせ細って、みっともなく人前に手足が出せなくなりました。

終戦で授業は平常に戻り、翌年父が戦地から帰還しました。食糧事情は最悪でしたが、充分ではなかったにも拘らず、私の体調は急に快復したのでした。

（「語り伝える戦時下の暮らし」宮崎玲子著より）



語り伝える  
戦時下の暮らし

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」発行時（平成28年3月発行）のものです。



# 当時の教育方針と戦後の想い

戦時・戦後の暮らし



聞き取り

やじま あきひろ  
矢島 明廣さん  
終戦時：18歳

太平洋戦争が起きた時、私は15歳で現在の西新宿である淀橋区に住んでいました。現在の日本は、民主主義の教育を受けている人ばかりですが、当時は軍国主義でした。その当時の教育方針は、自分を犠牲にしても国や仲間のために働くことが大切ということです。私たちは軍人や軍隊は偉くて、国を守って立派な人たちと信じていました。学校や新聞・ラジオでも、子どもの頃から教育されていました。そして、昭和16年に戦争が始まった時、誰もが緒戦の勝利を喜んでいました。今では考えられませんが、戦争の始まりは全然暗い気持ちにはならず、むしろ明るかったように思います。

戦争が始まってからというもの、物資不足は深刻になり餓死した人もいました。特に着るものや食材が不足していました。毎日、生きていくのに精一杯でしたが、戦争だから仕方ないと思っていたのです。空襲に遭う前は、親が一生懸命働いてくれたおかげで普通の生活はできていました。しかし、空襲に遭って淀橋区はすべて焼けてしまい、街全体が貧乏になってしまいました。

終戦の年、私は18歳で学生でした。家が焼け

てしまったので、上野にいる友だちの家に居候していて、親は山梨に疎開していました。終戦の日には学校にいましたが、学校もすべて空襲で焼けていました。玉音放送は、初めて聞く天皇陛下の声だったのです。この時に思ったのは、ただ戦争が終わったということだけでした。悲しさも悔しさもなく、むしろ茫然としていました。

その後、学校で列を作って田町から皇居前の広場まで歩いていきました。周りの風景はほとんどが瓦礫で、原っぱみたいでした。私たちは皇居前まで行って、最敬礼をしました。泣いているかどうかはわからないけれど、多くの人が、砂利の広場に正座してひれ伏していました。



太平洋戦争末期の  
東京大空襲

これから、空襲はなくなるが、日本がこの先どうなるのかはわからない。皇居前で頭を下げた時は、天皇陛下も気の毒だという気持ちでした。私たちもだけれど、天皇陛下もこれから先どうな

るのかわからない。不安ばかりが募っていました。戦争が終わって私たちは、また黙々と学校へ戻りました。

やがて数カ月して、父と私は元の住居に戻るため、焼け跡の瓦礫を片付けはじめました。淀橋区は見渡す限りの焼け野原で、点々と焼けトタンのバラックが建つ惨めな姿でした。小学校は、プールの中が教室だったそうです。

しかし、近所の人たちに会うと、こんなになっても故郷へ戻った安堵感がありました。故郷は大切に守りたいですね。



矢島さんへのインタビュー

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」発行時（平成28年3月発行）のものです。



## 平和への課題

戦時・戦後の暮らし



聞き取り

つじやたらう  
辻 彌太郎さん  
高田馬場四丁目在住  
終戦時：16歳

太平洋戦争が起きた昭和16年は、12歳で中学生でした。太平洋戦争が始まったことは家のラジオで知りました。学校では友だちと、「とうとう戦争が始まったな」などという話をしました。戦争中の暮らしは、さほど普段と変化はなかったように感じます。学校では授業で「三八式歩兵銃」

の訓練をしたり、現在の早稲田大学理工学部がある場所に射撃場があったので、本当の弾を使って練習したこともありました。

戦後、そこには米軍の兵隊さんも来ていました。でも彼らはカービン銃を使っていて、日本とアメリカの差を感じました。ほかには、三八銃を持って10キロ歩かされたりしたこともありましたよ。当時は10キロなんて軽いものでした。

そして海軍飛行予科練習生（通称：予科練）で飛行機の訓練をすることができました。予科練では、毎日操縦訓練を行い、卒業生は飛行機乗りとなって特攻に行くのです。お国のために死ぬとい

う隊長がほとんどで、私の友人も3人亡くなりました。しかし、隊長の中には生きて帰ってこいという方もいて、帰ってきた友人もいました。

戦争中よりも戦後のほうが食糧難はすごかったですよ。当時の主食は、かぼちゃやさつまいもでした。とにかく食糧の調達には最善の努力をしました。さつまいもの葉は甘くておいしかったけど、かぼちゃの葉はどうしても食べられませんでしたね。電車で食糧を買いに行くこともありましたが、帰りに検問<sup>けんもん</sup>に引っかかってしまうこともしばしばあって、その時は本当にショックですよ。仕方ないとは思いますが。でも、学生服を着ているとまねに通してくれたことがありました。やはり食べ盛りの時期に、十分な食事が取れないことは辛い<sup>つら</sup>ことだったし、当時の学生は今と違って勉強より体力づくりだったから、エネルギーになるものなら何でも食べるのが当たり前でしたね。

そして終戦の時は、中学校を4年間で卒業して大学に入学した年で16歳でした。その時は、天皇陛下のお言葉があるという情報が世間で流れていました。なんとなくだけ自分の中で「戦争が終わったのかな」などと考えていました。天皇陛下から終戦のお言葉を聞いた時は、ホッとしましたよ。でも、良かったと喜ぶ人はなかなかいませ

んでしたね。そういえばテレビドラマで戦争の物語を観ると、戦地に行く兵隊たちを送る時に涙を流したり、泣き崩れている描写がありますが、そのような光景は見たことないです。むしろ、「お国のために頑張れ」と応援している人が多かったように思います。

若い世代の方々に伝えたいことは、「自分の身は自分で守る」ということです。平和を続けていくには無関心では続かないと思います。戦後70年一度も戦争をしていないというのは、平和憲法があるから平和を守っているのか。それとも、ほかに理由があるからなのか。これは、今後のみんなで考えなければいけない課題だと思いますね。



辻さんへのインタビュー

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」  
発行時（平成28年3月発行）のものです。



# ハングリー精神が、 日本を変えた

戦争を体験して



聞き取り

ももたに あやま  
百瀬 文枝さん  
富久町在住  
終戦時：18歳

戦後私は、<sup>こうえんじ</sup>高円寺に住んでいました。焼け野原が散在している中、<sup>こうえんじ</sup>高円寺駅の近くは、戦火を免れ、小さい店が並んでいました。その中で、焼け跡から集めてきたのでしょうか、焼け焦げたミシンの本体が、店の屋根より高く山のように積んでありました。ミシンを再生し、商売しようという先見の明があったのは、「石田ミシン」でした。

間もなく、店先には、金文字入りの“シンガー”“蛇の目”“三菱”等のミシンが並び、衣類の無い時代に自分で服を作ろうと求められ、飛ぶように売れて、人々を楽しませたのです。

日本人は、ほっそりしているイメージだけれど、精神力はとても強いのです。なぜなら、ハングリー精神があったからなのです。お金の無い人は、良い物を作らないと儲かりません。物はすべて、ハングリーでなければ作れないのです。

人は、実際に遭遇して実感を得るものなのです。想像というのは、実感が伴わないためにわからないのです。太平洋戦争が始まった時、私は14歳でした。今はテレビがありますけど、この時代にはどこのお家にもラジオしかないので、戦争を目で見ることはありません。ですから、実感まで湧きませんでした。戦争中はパジャマなんて着ていられず、防空頭巾を傍らに置き眠りました。

毎日、<sup>くわしゅうけいほう</sup>空襲警報で目が覚めているから、肉体的にも精神的にも辛い毎日でした。そして、アメリカ軍の飛行機が低空で飛来したので、私が宮城のお堀にある<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕に飛び込もうとした時、ふと真上に見たアメリカ兵の顔が、人参の色に見えたのが、忘れられません。少し遅かったら、やられていたかもしれません。しかし、この話を聞いて、戦争はこうだったんだと、戦争を言葉だけで理解することは難しいと思います。実感を得るためには反復することがとても大事なのです。

終戦記念日などで新聞に載る体験談の話し手は、もう90代という人生最後の年齢を迎えています。次の世代は、戦争について実感できないかもしれません。実感はできないまでも、もっと進んで戦争についての本を読んだり、戦争の映画をテレビで放映し人々の心に刻み込まないと、戦争の悲惨さは忘れられていくと思います。何百万もの同胞の死に、申し訳なく、戦争はやってはいけないことを、繰り返して語り合う必要があると思います。



百瀬さんへのインタビュー

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」  
発行時（平成28年3月発行）のものです。



# わか 愚かさが判らない困った人たち

戦争を体験して



寄稿

なかじま えつこ  
中島悦子さん  
下落合三丁目在住  
終戦時：12歳

敗戦の日、私は隣のケイコちゃんの家に行った。  
「戦争終わったね」「うん」「もうB29来ないね」  
空を見上げると、抜けるような青空にぽっかり2  
つ白い雲が浮かんでいた。

その時、戦死した父は無駄死にだったと思った。  
その日まで「日本は神国だ」「負けたことのない  
国だ」「最後には逆転して必ず勝つ」と信じ込  
まされていた。日本は勝つはずだと信じて始めた  
戦争だろうか。

残された遺族にとって、毎日が辛酸の日々とな  
った。それは、今日まで続いている。理不尽な  
世間の冷たい視線を浴び、不幸をもたらす疫病神  
のように嫌われた。人々は戦争を1日も早く忘れ  
たいようであった。だから私は、最近まで口を閉

ざして語らなかつた。

自分の死の意味も判らぬまま、死地へと追いや  
られた人々の声は、無念と悲しみに地鳴りのよう  
に地底からのぼってくる。私は父の最期を想像  
する。

どこでどう間違ってしまったのか、その理由を  
知らなければならない。それが死者への供養とな  
る。私のつたない古代史研究も、40年を超える。  
これは死者への鎮魂の祈りである。人間はどうし  
てこうも馬鹿なことを繰り返すのだろう。人間の  
愚かさは底無しだ。ダイナマイトの側で線香花火。  
否、大都会は一瞬にして原子野に変わる。その想  
像力がもう失われている。

戦争は遊びではない。そして死ぬのは庶民であ  
る。残された未亡人、遺児たち、息子を失った親、  
兄弟、3・4世代を悲痛な運命へと突き落す。そ  
の悲劇は計り知れない。

何百万の怨嗟の声はどこに行くのだろう。

掲載内容は「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」  
発行時（平成28年3月発行）のものです。